

富山県 朝日町

柳田遺跡
下山新東遺跡
下山新遺跡

発掘調査報告書

2006年
朝日町教育委員会

序

今回調査区の代表地区「下山新遺跡」は朝日町の西端、入善町、黒部市（旧宇奈月町）との境界線上に位置します。この地域は、黒部川の右岸地帯、扇状地上に形成された台地に存在しており古くから多くの縄文遺跡が点在する場所として知られています。周辺では朝日町側には国史跡「不動堂遺跡」、今回調査区に含まれる玦状耳飾・磨製石斧製作地「柳田遺跡」、黒部市（旧宇奈月町）側には「愛本新遺跡」「風野遺跡」、台地下入善町側にも「新屋島遺跡」といった多くの縄文時代遺跡群が当時の繁栄を物語ります。

「下山新遺跡」では、今回調査区から北側にあたる地区において、昭和47年に圃場整備事業に先立つ大規模な発掘調査が実施されています。この際には、住居跡から縄文時代中期のランプ『釣手上器』や、『有孔鍔付土器』といった、現在でも貴重な研究資料として活用されている縄文土器が多数出土しました。

今回の調査においては、試掘調査の段階で、ほとんどの領域が調査済と考えられていました。しかし、本調査終了間際、最後の一角に住居跡が発見され、そこから次々と土器や石器が確認されました。幾度にわたる発掘調査で発見されることもなく、圃場整備や田畠作業で破壊されることもなく本来の姿を見てくれた遺跡に神秘性を感じざるを得ません。

今回の調査結果を今後の扇状地上の遺跡群の調査・研究を進める上で大切な資料として残し、活用することができれば幸いです。

最後にこの調査ならびに報告書作成にご協力を頂きました地元住民の方々及び富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年11月

朝日町教育委員会
教育長 永口義時

例　言

- 1 本書は富山県下新川郡朝日町柳田地内・下山新地内に存在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は農免農道新川中部地区整備事業に先立ち朝日町教育委員会が実施した。
調査費用は富山県が負担した。
- 3 調査事務局は朝日町教育委員会におき、調査事務の総括は財団法人朝日町文化・体育振興公社事務局長代理水島康彦が行つた。
また、調査にあたり朝日町シルバー人材センター及び地元住民の方々の協力を得た。
- 4 調査期間 平成16年6月25日～平成18年1月20日
- 本　調　査　　柳　田　遺　跡　　平成16年10月16日～平成17年2月18日
　　　　　　　下山新東遺跡　平成17年1月14日～平成17年3月14日
　　　　　　　下山新遺跡　平成17年10月3日～平成18年1月20日
- 調査面積　　柳　田　遺　跡　　1,379m²
　　　　　　　下山新東遺跡　　129m²
　　　　　　　下山新遺跡　　673m²
- 5 発掘調査担当者は次のとおりである。
　　担当者　（財）朝日町文化・体育振興公社 事務局長代理　水島康彦
　　　　　（財）朝日町文化・体育振興公社 文化財保護主事　島　瑞穂
- 6 資料の整理、本書の編集・執筆は文化財保護主事島瑞穂が行つた。
また、調査期間中及び資料整理・本書の作成において次の方々からご指導助言をいただいた。
記して敬意を表したい。
　　富山県埋蔵文化財センター　　斎藤　隆　酒井重洋　高梨清志
　　富山県教育委員会生涯学習・文化財室　　安念幹倫　越前慶祐　山本正敏
- 7 本誌の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
 - (2) 遺構の表記は次の記号を用いた。 溝：SD　土坑：SK　不明遺構：SX
 - (3) 挿図の縮尺は等倍・1/2・2/3とした。
 - (4) 写真図版の遺物の縮尺は等倍・1/2に縮尺した。
- 8 土色の色名については、1997年度後期版「新版 標準土色帖」・土色計SPAD-503を使用した。
- 9 出土品及び記録資料等は、朝日町教育委員会の指示に基づき朝日町文化・体育振興公社が保管している。

本文・目次

序 文	4-1 柳田遺跡	遺構編 ···· 5
例 言	4-2 柳田遺跡	遺物編 ···· 6
目 次	5-1 下山新東遺跡	遺構編 ···· 7
I 位置と環境	5-2 下山新東遺跡	遺物編 ···· 7
第1節 地理的環境 ···· 2	6-1 下山新遺跡	遺構編 ···· 8
第2節 歴史的環境 ···· 2	6-2 下山新遺跡	遺物編 ···· 9
II 調査に至る経緯 ···· 3	IVまとめ ···· 21~22	
III 調査の概要	参考文献 ···· 23	
1 調査の方法 ···· 4	報告書抄録 ···· 38	
2 地形・立地 ···· 4		
3 基本層序 ···· 4		

挿図・図版・表 目次

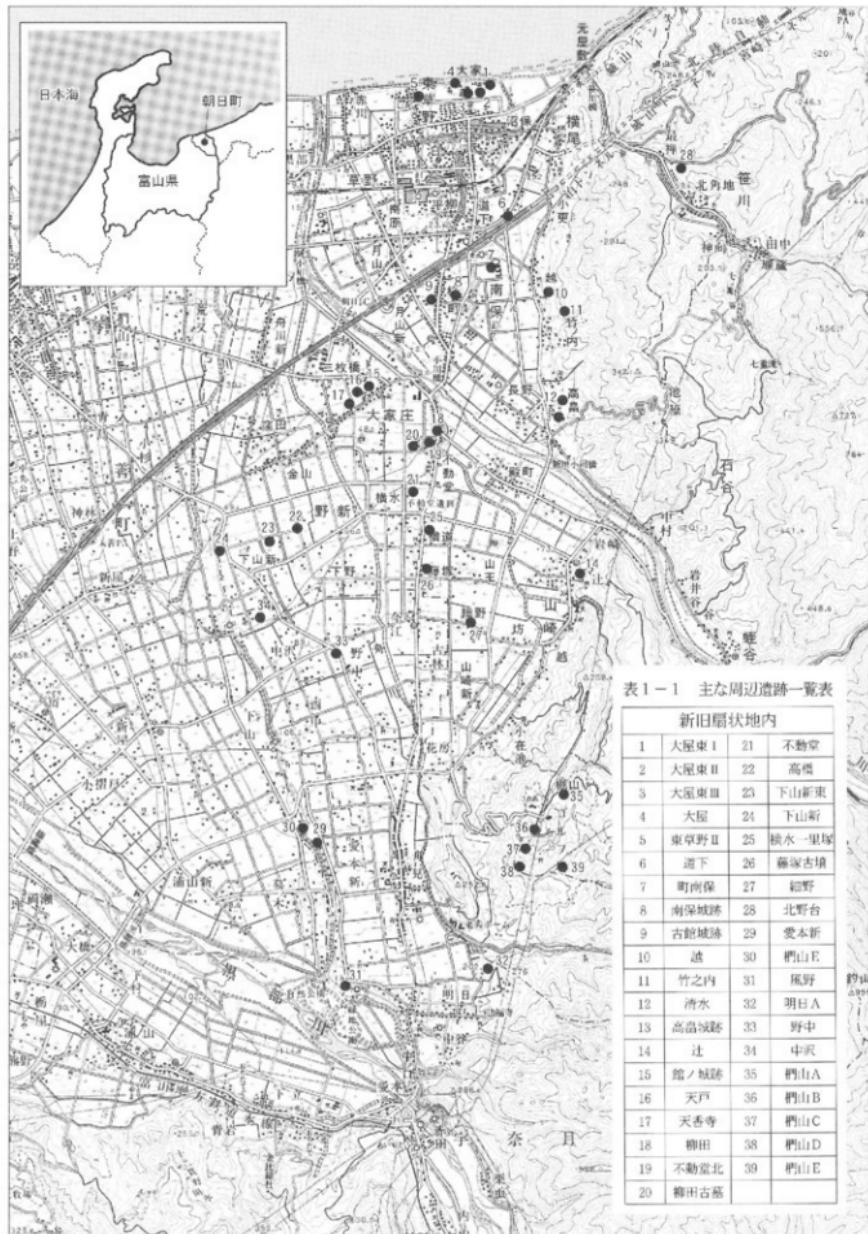
第1図 遺跡の位置と周辺の地形	1
第2図 柳田・下山新東・下山新遺跡調査区位置図	3
第3図 柳田遺跡調査区全体図	10
第4図 柳田遺跡②地区 遺構 平面・土層図	11
第5図 柳田遺跡③地区 遺構 平面・土層図	12
第6図 下山新東遺跡 調査区全体図	13
第7図 下山新東遺跡 遺構 土層図	13
第8図 下山新遺跡 調査区全体図	14
第9図 下山新遺跡 住居跡 平面・土層図	15
第10図~第14図 遺物実測図	16~20

表1 主な周辺遺跡	1
-----------	---

写真 目次

柳田遺跡	調査区全景・遺構写真	24
下山新東遺跡	調査区全景・遺構写真	25
下山新遺跡	調査区全景写真	26
下山新遺跡	遺構写真	27~28
柳田遺跡	遺物写真	29~32
下山新東遺跡	遺物写真	25
下山新遺跡	遺物写真	33~36

I 位置と環境



第1節 地理的環境

富山県朝日町は新潟県との県境に位置する。町中心部は小川を挟み北東側が小川（2級河川）の扇状地、南西側が北アルプス連峰から流れ出る黒部川（1級河川）の旧扇状地によって形成されている。

今回の調査区「柳田遺跡」は大家庄柳田地内に存在し、古くから縄文時代から中世にかけての遺跡として知られている。標高は約48m、小川と黒部川の新旧扇状地帯の接点にあたり、さらに小河川が扇状地内を流れるため、所々にわずかな起伏が見られ、当遺跡も小川支流の山合川左岸の微高地に位置している。遺跡は現在のところ全体で約3.9haの括りが確認されている。

「下山新遺跡」は下山新馬坂地内に存在する。この遺跡は黒部市（旧宇奈月町）の愛本橋付近を扇頂部とする黒部川によって形成された舟見野扇状地の末端部分に位置する。この地域は隆起扇状地であり、圃場整備が進んだ現在も水田が段階状に整備されているところなどからその姿を確認することができる。また、地下水が豊富で、湧水の流路も確認されており、東方約2.5km地点に存在する国史跡「不動堂遺跡」近辺の生活においても貴重な湧水资源としての役割を果たしていたと考えられる。

「下山新東遺跡」は「柳田遺跡」の西方約2km、「下山新遺跡」の東方約500mと、2遺跡の中間地点に存在し、同じく隆起扇状地上の小丘陵上に立地している。

第2節 歴史的環境

「柳田遺跡」は田畠の耕作時に掘り返された土の中から多くの遺物が見つかることがあり、地元では古くより一帯が遺跡であることが知られていた。昭和49年の調査では縄文前期の住居跡をはじめ、前期から晩期及び中世の遺構、遺物が確認されている。

平成14年から17年にかけて行われた県道拡幅事業に伴う調査では、同じく縄文前期の住居跡が確認された他、玦状耳飾や石器類、これらの製作に使用されたと考えられる砥石などの製作道具が大量に出土した。これにより「柳田遺跡」はこの時期宮崎・境海岸で採集される蛇紋岩を主に用いた石器類の製作遺跡であることが判明している。朝日町には同じ縄文時代の石器類が製作されていた遺跡として宮崎・境海岸平野沿いに「境A遺跡」「明石A遺跡」「浜山遺跡」「馬場山遺跡群」が存在する。たくさんの玉類や石器類が原産の翡翠や蛇紋岩を用いて製作され、日本全国に流通していた。海に近い工房だけでなく、台地内においても製作が行われていたことがわかり、幅広い範囲で積極的に製作が行われていたことになる。

中世の遺跡としては、昭和23年・49年に行われた調査により確認された石室を持つ「柳田中世古墓」が挙げられる。平成14年度調査においても調査区内の土坑から珠洲壺が逆さの状態で埋設されたものが確認されており、生活が営まれていたことがわかる。

「下山新遺跡」「下山新東遺跡」が存在する隆起扇状地帯沿いには他にも昭和48年発見された当時は日本最大であった大型住居跡を持つ国史跡「不動堂遺跡」（朝日町）、「坪野遺跡」（入善町）、「愛本新遺跡」「風野遺跡」（黒部市〔旧宇奈月町〕）など、前期から晩期にかけての幅広い時代の縄文遺跡が存在する。「下山新遺跡」は昭和47年の調査において住居跡の下部に釣手土器が埋設された状態で出土するなど、たくさんの住居跡や縄文土器が確認されている。出土した土器の種類は、新崎式・天神山式・古府式・串田新式・氣原式と多種を数える。縄文中期前葉から中葉を中心に後期前葉にかけて大規模な集落が営まれていたと考えられる。

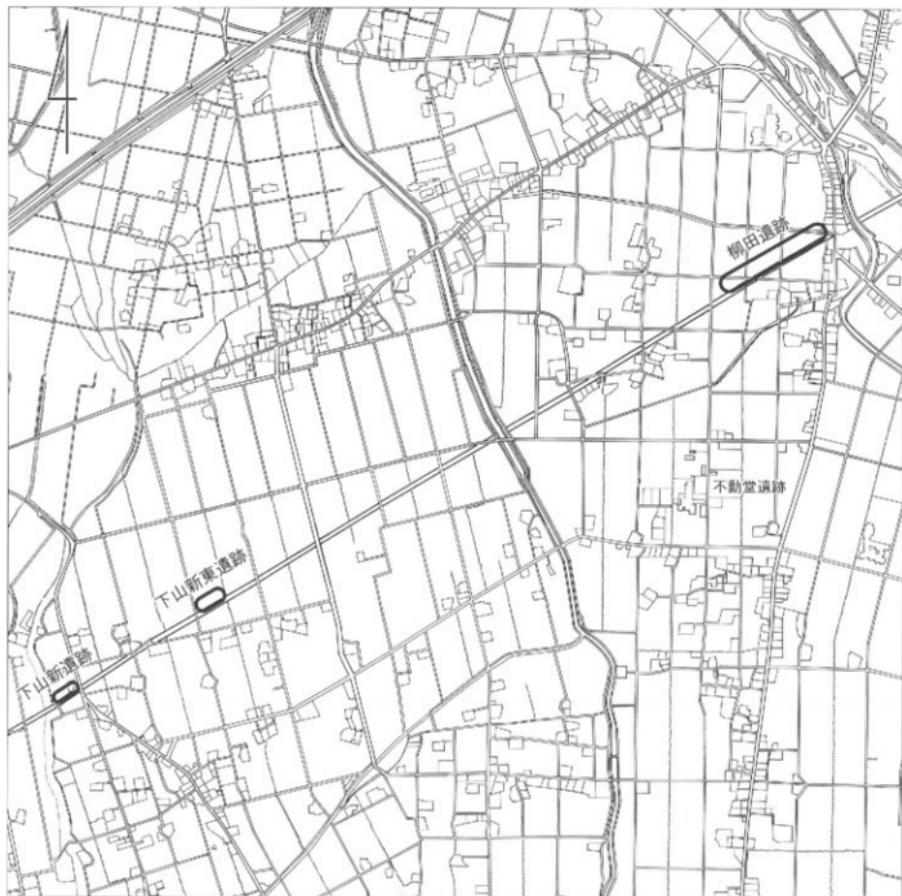
「下山新東遺跡」は昭和52年の調査において確認された遺跡であるが、調査範囲も出土遺物も少なく、正確な時期の特定はまだ難しい。前回出土した土器は、中期中葉から晩期にかけてのものであることから、「下山新遺跡」と同時期から、それ以後に栄えた遺跡として位置づけられるだろう。

約4,000年以上にもわたり、縄文人がこの扇状地上に住み続けたということは、この土地が風土・食物・水資源に恵まれた生活を営むために重要な課題をすべて満たしていたからに相違ないだろう。

II 調査に至る経緯

平成15年度に、富山県魚津農地林務事務所において、北陸新幹線朝日黒部間沿いに農免農道新川中部地区整備事業が実施されることとなった。予定地が埋蔵文化財保蔵地である柳田遺跡・下山新遺跡・下山新東遺跡の範囲内に当たるため、富山県教育委員会文化財課と朝日町教育委員会が協議を行った。3地区とも平成13年に財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所が調査を行った北陸新幹線関連遺跡と隣接するため本調査が必要であると決議したが、下山新遺跡に関しては平成13年度の調査において主だった遺構等が確認されなかったため、平成17年5月に事前調査として試掘調査を行った。

試掘調査の結果、遺構・遺物の出土状況および、過去の調査・立会い調査の遺物出土状況から推測して、調査 당시に建物が建っており、試掘調査ができなかつた部分を含めた県道を挟んで西部約600m²を本調査対象地とした。ただし平成17年10月より調査開始後、未試掘区において住居跡と考えられる遺構の拡がりが工事対象地に拡がりを見せることが判明したため、急速に本調査対象地を拡張し、調査を行った。



III 調査の概要

1 調査の方法

3地区とも調査区内の建物・コンクリート等の除去後、調査区外との境界線を確定させ、田からの浸水を防ぐため人力で畦を作成した。その後バックホウによる表土除去を行い、10mごとの基本杭を設置し、その杭に基づき2m×2mのグリッドを設け、それを基準とした。基本杭は国家座標に基づいて起点を設定し、座標軸は南北をX軸東西をY軸に設定した。調査は、表土除去後は人力による掘削作業を行い、遺構・遺物・土層等の確認をし、後日整理作業を行った。

2 地形・立地

柳田遺跡は、朝日町大家庄柳田地内に存在する。2級河川小川の支流にあたる山合川左岸標高約48mの微高地に位置する。前回平成14年から17年度に行われた調査区においては、縄文前期の住居跡を初め縄文土器・石器に加えて块状耳飾などが出土している。今回の調査区は大規模な圃場整備が行われており、平成13年度の柳田遺跡発掘調査（富山県文化振興財团）から考察しても大部分が削平・消滅していることが予測された。

下山新遺跡・下山新東遺跡は朝日町下山新地内に存在する。黒部川によって形成された舟見野扇状地の末端部分に位置する隆起扇状地に立地しており、圃場整備が行われた後も水田が階段状に整備されている。過去何度も調査が行われた地域であり、多くの縄文遺構・遺物の出土が確認されているが、今回調査区に関しては周辺が昭和49年の圃場整備事業にかかる際に大規模に発掘調査が行われており、さらにその後圃場整備が行われていることから、試掘においても盛土・削平がかなりの量で確認されたため、遺跡自体の良好な状態での残存は厳しい状況にあると推測されていた。

3 基本層序

柳田遺跡

東西セクション北壁を測る。調査区内を道路が横切るため、4区(①・②・③・④)に分けて同時に調査を行った。①地区はほとんどが何らかの工事により2m以上掘り下げられ、上部1mは砂石が敷かれ、下部1mは石が混じる擾乱層であったため、遺構の残存は厳しいと判断した。③地区は表土を除き、3層から4層確認できた。1層から2層の遺物包含層までは約40cmから1mを測る。遺物包含層は一部削平擾乱を受ける箇所はあったが比較的良好な状態で確認できた。②地区は中心部約15mに遺物包含層が確認できたが他は削平され、耕作土1層と擾乱層3層が確認されるに留まった。

下山新東遺跡

東西セクション北壁を測る。表土は約20cm、1層から2層包含層までは約30cmと浅い。全体で漸移層を含め4層確認できた。

下山新遺跡

東西セクション北壁を測る。調査区中心部の土層面に関しては、建物の基礎がかなり深くまで入り込み、コンクリートがむき出しの状態で確認されたが、住居跡周辺部（調査区西側）に関しては、とても良好な状態で土層面の確認ができた。遺構が確認された部分の土層は遺物包含層までが耕作土から約20cmと浅く、田起しなどで擾乱が起きている可能性は考えられる。

柳田遺跡		下山新東遺跡			下山新遺跡	
表土	10YR4/2 灰褐色土	表土	10YR4/1 褐灰色粘質土	盛土	7.5YR2/1 黑色 緩	
1層	10YR4/1 褐灰色粘質土	1層	10YR3/1 黑褐色粘質土	1層	10YR3/2 黑褐色粘質土	
2層 （遺物包含層）	10YR2/2 黑褐色粘質土	2層 （遺物包含層）	10YR3/2 黑褐色粘質土		1'層（漸移層）	
2'層（漸移層）		2'層 （漸移層）		2層 （遺物包含層）	7.5YR2/1 黑色粘質土	
3層 （地山）	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	3層 （地山）	10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土	3層 （地山）	10YR3/3 暗褐色粘質土	

4-1 柳田遺跡 遺構編

調査区が東西に細長いため（全長約300m）4地区に分けて記述する。なお、遺構は共通の番号をつける。全体で溝9条、土坑360基を確認した。全体的に非常に礫が多く含まれる調査区である。

調査区西側から①地区（154.65m²）は約2m下まで掘り下げたが、何らかの工事による擾乱が激しく何点か石器が出土したが、遺構は確認できなかった。

②地区（365.84m²）は、全体的に礫が多いが、土層は安定しており、比較的礫の少ない中心部に集中して遺構が確認された。

③地区（670.41m²）は西側が急激に深く落ち込むものの、全体的に平均して遺構が確認された。

④地区（187.37m²）は南北に拡がる調査区で平成15年から17年にかけて行われた主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業に伴う調査範囲及び新幹線関連遺跡発掘調査用地へ繋がる。小規模ながら土坑が確認された。

S K117

③地区X78Y85北側に位置する。直径約1.5m深さ約25cmを測り調査区外へ拡がる。蛇紋岩製の磨製石斧（火損品）が出土。

S K273

③地区X68Y70北側に位置する。直径約20cm×20cm深さ約10cmの小型の土坑である。深さもないが、土坑内から青磁の剥片が確認された。並列するS K274も深さは10cm程度と浅い。

S K267

③地区X68Y69北側に位置する。直径約120cm×80cm深さ約25cmを測る。土坑内からは遺物は確認されていない。周囲と比較して大型の土坑である。用途は不明。

S D06

③地区X72Y76地点に拡がりを見せる。大量の礫が含まれる遺構である。幅約5m深さは約20cmを測り、調査区外へ南北ともに拡がりを見せる。礫に混ざって、分銅形の打製石斧が出土している。遺物は混入した可能性が高い。時期は不明。SD周辺に土坑が何基か存在するが規則的な並びは確認できない。今回の調査区と平行に調査が行われた平成14年度新幹線関連遺跡発掘調査（財團法人富山県文化振興財団調査）においても周辺でSDが確認されており、南北に延びる河川跡もしくは自然流路と考えられる。

S D08

③地区X70Y73地点に位置する。調査区を横断する幅約1m深さは約20cmと浅い。SD内にSK242（深さ約10cm）・SK243（深さ約20cm）の2基の土坑を含む。調査区外北側に延びる。

X74-75 Y80-82地点

③地区。明確な規則性はないが、19基の土坑が円形に並ぶ。直径・深さともほとんど共通しており、それぞれの土坑の直径は約20～30cm、深さ約20～40cm、深いもので50cmと深い。

周囲に掘り込みや周溝、地床炉や石組炉の類は確認できなかったが、調査区周辺がかなり耕作等により削平されていることを考慮すれば、周辺包含層からは縄文土器の破片も多数出土しており、住居跡であった可能性は考えられる。ただし土器の状態はかなり磨耗が激しく、正確な時代の特定は難しい。

S D09

②地区中央部に位置する。調査区を南北に横断する幅約3m深さ約50cmの溝である。②地区はこの溝を中心にして土坑が拡がりを見せ、ほとんどの遺構がSD09を含めてX42-50・Y30-40地点に集中している。SD09東側の土坑に関しては、SDに沿った形で南北方面に向かって並ぶ。調査範囲が5mと狭いため、正確な並びの方向性は確認できないが、SDに何らかの形で関係する土坑である可能性は考えられる。

4-2 柳田遺跡 遺物編

主に、縄文時代・中世の遺物が出土した。遺構内からの出土はほとんどなく、大半が包含層からの出土である。そのため、削平や盛土による土砂の移送も受けていると見られ、上器自体の磨耗がかなり激しい。

縄文土器

整理箱（65×40×10cm）で7箱出土した。その大半が磨耗しており1片が3～4cm程の剥片で復元などは不可能である。まとまった出土はなかった。磨耗が激しいため、ほとんどの上器が判別不能であったが、大まかにみて、前期末葉にはじまり、中期後半、後期前葉・中葉・後葉、晚期前葉・中葉までの幅広い時代の土器が確認された。（以下（ ）内は写真図版番号）

- 前期末葉** 福浦上層に比定される。小片だが、縄文地に結節浮線文が施されている。（Y-1）（Y-2）
器面に半隆起線で渦巻文が施されている。（Y-3）
- 中期後半** 厚みのある器面に直接刺突文が施文されている。（Y-6）（Y-7）
- 後期前葉** 無文地の器面に太目の棒状具満巻状の幾何学模様が施されている。（Y-9）
- 後期中葉** 口縁部が山形の波状口縁を呈し、口縁部末端と内面に刺突文が施され、外面には蛇行沈線文が施されている。内面にも数条の沈線が施されている。（Y-10）
- 後期終末** 無文地に楔形文が施文されているものや磨消縄文により施文されているものがあり八日市新保式に比定される。判別可能な土器の中で最も多く分類された。（Y-15～Y-19）
- 晚期前葉** 同じく磨消縄文により施文されているが磨耗が激しく、縄文がはつきりとしない。御経塚式に比定されるか。（Y-20～Y-23）
- 晚期中葉** 棒状具により平行線が施文され、細かい列点文が刻まれている。（Y-24）

中世の土器

珠洲が整理箱で5箱、土師質土器が整理箱で3箱、青磁が1箱分出土した。縄文土器と同じく磨耗が激しく、完形品やまとまった遺構内での出土はないが量的には時代を特定できる量は充分に出土した。しかし、ほとんどが包含層上で検出されている。

珠 洲 完形品の出土はなく、すべて破片である。主に甕、插鉢がほとんどの割合を占める。

土師質土器 完形品はない。磨耗が激しく、接合も難しい。小形・中形の平皿が多く見られる。

青 磁 完形品はない。高台部のあるものとないもの（小皿）があり、高台のみの破片など破片ではあるが器形もさまざまなものがあったと考えられる。

石器

打製石斧 完形品16点、欠損及び未成品が22点出土した。完形品内訳は鉢形13点、短冊形2点の他、欠損品で分銅形2点が確認できた。蛇紋岩製が2点、他はほとんどが砂岩製。

磨製石斧 完形品はない。欠損品・未成品をあわせて54点出土している。状態のよいもののうち、定期式磨製石斧は17点、磨製石斧は2点確認された。長径10cm以上のものが大半を占め、小形の石斧は出土しなかった。材質はすべて蛇紋岩製である。

石 錘 2点出土した。長径約7cmのものは材質が砂岩。長径約5.5cmのものは蛇紋岩製である。両方とも楕円形で扁平な石をそのまま利用し、両端を打ち欠いている。

玉 製 品 1点出土した。未成品と考えられる。中央部に穿穴が施され、上部には平行線が刻み込まれる。全体的に整形されているが、製作途中に欠損したものであろうか。頁石製。

石 棒 すべて欠損品であるが4点出土した。

石 刀 欠損品。破片が細かく全体の形成がつかめないが、表面はきれいに加工されている。

原 石 翡翠原石の剥片1点、黒曜石剥片5点確認した。用途は不明であるがかなり薄く剥ぎ取られていることから、何らかの加工品の剥片であるといえる。他にも蛇紋岩の原石が多数出土している。

出土した遺物の量から推測して、今回の調査区柳田遺跡は、縄文時代全般及び中世に繁栄を見せたと考えられる。しかし全体的に削平を多く受け、包含層が擾乱されており、どの時代にも共通して遺物が非常に磨耗している。のことから、明確な遺跡の時代背景を記すことは難しい。

5-1 下山新東遺跡 遺構編

標高は約60mを測る。全体で9基の土坑が確認された。調査面積も少なく、調査区の幅も狭い(5m)ため、9基の特定の遺構に対する並びは確認できない。また、かなりの範囲で削平が行われており、極めて遺構・遺物の残存状態は悪い状態であった。全体的に礫が多い調査区である。

S K01 S K02 調査区西側X114Y103地点に位置する。双方とも直径約30cm深さ10cmと浅い。並列しているが直接の関係はないと考えられる。

S K03 調査区西側X114Y105地点に位置する。直径約30cm深さ約10cmを測る。S K01、02との関連性は無い。

S K04 調査区中央部X107Y116地点に位置する。直径約20cm深さ約10cmを測る。他の遺構と距離があり、単独性が強く、何らかの用途を持った遺構とは考えにくい。

S K05 調査区中央部X118Y109地点に位置する。直径約140cmを測る。深さは約12cmと浅いが、遺構内に約40cmの扁平な石が入り込む。調査区外に遺構が統くため、全体の形を見るることはできなかった。用途は不明。

S K06 S K05と並ぶ。調査区中心部X118Y109地点に位置し、幅約40cm、深さ約20cmを測る。
S K05と同じく、調査区外へ拡がりを見せる。風倒木跡か。

S K07 調査区西側X111Y102地点に位置する。直径約40cm、深さは約20cmを測る。しっかりとした形を持つが、周辺に関連するような遺構は存在せず、柱穴等の可能性はない。

S K08 X112Y104地点に位置する。直径約30cm、深さ約20cmを測り、調査区外に若干拡がりを見せる。S K09と関連性があるか。

S K09 S K08と並びX112Y104地点に位置する。直径約60cm深さ約30cmを測る。調査区外へ拡がりを見せる。S K09から北に石列が組まれている。用途は不明であるが旧の水路もしくは河川跡であった可能性がある。

以上のことから、上部包含層がかなり荒れており、住居等の柱穴などに関連する遺構は確認できなかつたが、削平・擾乱以前は何らかの遺構は存在していたと推定される。

5-2 下山新東遺跡 遺物編

縄文土器が数点、近代陶磁器が1点出土した。包含層の削平・擾乱の影響により小片の上、かなり磨耗が激しく、詳しい年代特定までに至らない。石器に関しては、砂岩質の石製品が1点出土したに留まった。上部包含層がかなり擾乱されており、削られた上部包含層に遺物が集中していたもしくは表土を移送した際に土器が混入していた可能性も考えられる。

下山新東遺跡は、昭和52年度に行われた高橋遺跡発掘調査時に同時に分布調査を行い、発見された遺跡である。前回の調査においても、若干の縄文土器小片、打製石斧・黒曜石製石鏃が出土しているが関連する遺構は確認されていない。遺物の推定年代は縄文前期後半から下山新遺跡が最も栄えた時期である中期中葉、晚期後半まで確認されている。柳田遺跡と同様、縄文時代の幅広い時期に関連すると思われるが、今回の調査区は、遺跡自体は周辺の柳田遺跡や不動堂遺跡、下山新遺跡などのそれぞれの時代を代表する大規模な遺跡と違い、小規模な遺跡群であり、なおかつ当遺跡の栄えた中心部から離れた遺物散布地であったと考えてもよいだろう。

6-1 下山新遺跡 遺構編

昭和47年に行われた圃場整備に伴い、大半の遺構は検出されたもしくは整備によって削平されたことが予想されたことから、最初に試掘調査を行い、概算の調査区を設定し、本調査を行った。その結果、全体で4条の溝と64基の土坑が確認された。調査区中央部は過去の建設物の基礎によりほとんどの包含層・遺構検出面まで攪乱され、遺構検出は難しい状態であった。調査終了間際に、(試掘調査未調査区周辺から) 調査区外に向かって遺物包含層が伸びていることが確認され、急遽調査区を拡げて調査を行ったところ、縄文時代中期と推定される住居跡が確認された。

住居跡

調査区西側X64-68 Y25-30の地点で確認された。隣接する田から約60cm下にあたり、かなり浅いことから、住居跡上層部遺物包含層の一部は削平されていると考えるのが妥当であろう。

住居跡一帯からは炉跡4基、埋甕2箇所（浅鉢・甕）復元可能な一箇体の縄文土器が2点確認され、住居跡の立ち上がり部分が西側一角に確認できた。この部分から中心部分より西側は、貼床が残り、生活面であることがわかったが、住居跡全体までは確認できなかった。柱穴の直径は平均で約20~40cm、深さは約40cmを測る。特徴的な6もしくは10基が並ぶ配列ではなく規則性なく並び、長円形を形成している。いくつかの時期が異なる住居跡が重なって形を形成している可能性が高い。すべての炉は柱穴に開まれた範囲内にあるが、炉の並びに規則性はなく、同一の住居跡で使用されたものかは判断しがたい。

しかし、柱穴の範囲から推測して、仮に4基の炉をもつ長円形の住居跡であるとするならば、10m×6mと大型住居跡ということになる。炉跡は、昭和47年に調査された際に出土したが（長方形に大きく組まれた炉で、か内には大量に土器が敷き詰められていたり、炉下部に土器が埋められていたりする形式）ではなく、炉石の組方は1つの扁平な石を4もしくは7つで囲む形式と、4個の石を組み合わせて方形を作る形式であり、近隣に存在する同時期の大型住居跡不動堂遺跡2号住居（17m×8m）と同じ形式をとっている。のことからも同類の住居跡であることは十分に考えられる。炉跡の断割りでは底部に土器などは確認されなかった。住居跡の中心部に当初住居跡使用時とは別の時期の風倒木と考えられていた土坑があり、調査終了後に確認したところ、大量の土器が土坑内から出土した。このことから住居に関連する遺構であるということが判明し、急速写真撮影を行った。富山県立山町野沢孤幅遺跡発掘調査（昭和57年～59年）で縄文時代中期中葉の遺構、長円形で大型、住居跡内にロート状の大型土坑を有し、扁平な石を囲む炉が住居内に数基確認されたという今回の調査区と同様の特徴を持つ住居跡が確認されている。これらの遺跡との関連性については今後の検討課題である。

深鉢の埋甕は1号炉の南側柱穴近くに埋められていた。浅鉢は鉢の中に翡翠の剥片が置かれた状態で住居跡北側に埋設されていた。2点確認された一箇体に関しては2点とも柱穴の外側で確認されている。この他柱穴の外側には他にも何箇所か土器がまとまって出土しており、使用できなくなった土器を住居外へ廃棄していたと考えられる。

この調査区は非常に礫と風倒木跡が多く確認されている。木が倒れたことにより掘り返された土で遺構が壊されているものもあった（SD01）。また、全体的に礫が敷き詰められた土地で、遺構の範囲がわかりづらいが、住居跡周辺に関してはほとんど礫はみられない。少しの平地を見逃さず、生活にうまく取り入れ、活用していた痕跡が垣間みれる。

また、調査区東側は今回の調査では主だった遺構は検出されていないが、平成16年1月に実施した用水路拡幅工事に伴う立会い調査において、約10m北側から用水に沿って大量に縄文中期の土器が出土している。この調査区の大半は圃場整備前に調査確認されているが、現在も水田の畦や田起し作業の際に土器や石器などが見つかることが多い。周辺の湧水が縄文時代の人々の繁栄を支えていたのであろう。

6-2 下山新遺跡 遺物編

縄文土器

復元可能な一個体が4点他、整理箱で約15箱確認された。そのほとんどが住居跡もしくは周辺の調査区西側で出土している。

台付鉢 (N-17)

住居跡北側X66Y27出土。この周辺において特徴的な中期中葉の上山田式（天神山式）土器と考えられる。口径約17cm、器高約13cmを測る。上部から見た器形は円形である。口縁部全体及び胴部約半分が欠損しているが復元可能である。胴部はやわらかい膨らみを持ち、全体に文様が施されるが台部は無文である。文様は隆帯と半隆起線で構成される。胴部分上部に半隆起線2条、隆線1条を廻らせ、隆帶には爪形文が、その下に隆帶を持つ渦巻文が施されている。また、半隆起線文により生じた空白部に円形の文様を施して、七器全体を文様で埋め尽くしている。

深鉢 (N-18)

住居跡南側X64Y27出土。中期前葉の新保・新崎式土器に比定される。口径約20cm、器高約15cmを測る。上部から見た器形は円形である。口縁部及び胴部が約1/3程度欠損しているが復元は可能。頸部でくびれ、若干あるが内面に弧を描き外反する。平縁口縁を呈し、頸部上半は無文、胴部のみに文様が施される。半截竹管状具による爪形文が施された半隆起線が胴上部を廻り、胴部全体に半隆起線によるB字状文、格子目文、楔形刻目文が隙間なく割付されている。

X66Y27 (P34 N-11他)

一箇所に廃棄された状態で出土。同一個体と考えられる。中期前葉の新保・新崎式土器に比定されるか。胴部破片の形状から深鉢と推定される。器面全体に隙間なく半隆起線文を施す無間半隆起線文のみで構成されている。

この他住居跡周辺に関してはそのほとんどの土器が中期前葉から中葉の特徴を表している。昭和48年の調査においても縄文中期の土器が中心に出土しており、今回の調査区においても同時期の遺物が集中して確認されたことから、下山新遺跡は過去の調査区から南側についても縄文中期全般で繁栄を見せた遺跡であるということがわかる。

石器

打製石斧 完成品9点、未完成品及び欠損品5点確認された。器形の内訳は、短冊形5点・撥形8点・不明1点である。材質は蛇紋岩が1点あとはすべて砂岩である。一番大形のもので刃部幅が約10cm（欠損品のため全長は不明）を測る。ほかは中型（全長12cm程度）のものが大半を占める。

磨製石斧 形式が確認できるもので完成品3点（内2点は小形石斧）、欠損品16点出土した。すべて定角式磨製石斧で材質は蛇紋岩製である。小形石器は3点確認されたが3点とも状態がよく破損も少ない。大きさは大きいもので全長約14cm、小型のもので約5cmを測る。

円盤型石器 直径約3.5cm厚みは約8mmを測る。扁平な石をそのまま加工し、周縁から整形加工を施している。研磨は行われていない。未完成品と考えられる。(N-24)

削 器 両刃とも整形加工が施されている。研磨は施されていないが、剥離を行い、裏面は平面加工、表面は若干の山型を呈し、形状は三角形に形成されている。(N-23)

背面に礫面の残る扁平な剥片を利用して、周辺に簡単な二次加工を行っている。材質は砂岩。(N-27)

翡翠原石 敲き石として利用されていたと推測される。全長約7cmを測り、風化し状態はあまりよくなないが、打撃痕が確認できる。(N-25)

住居跡X68Y27地点より土器とともに出土。剥片ではあるが、片面に磨き痕が見られる。(N-26)

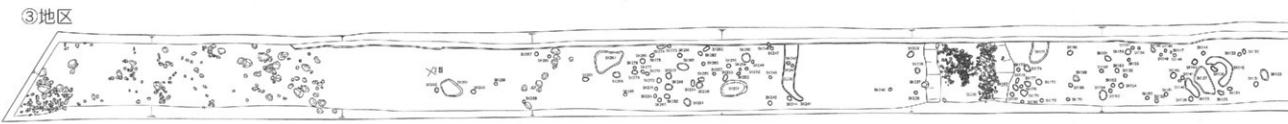
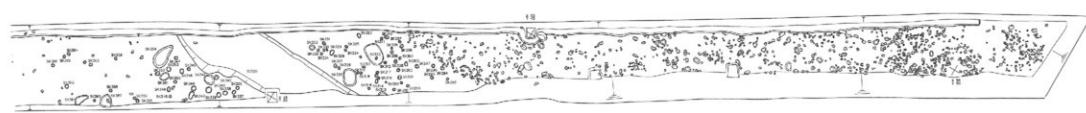
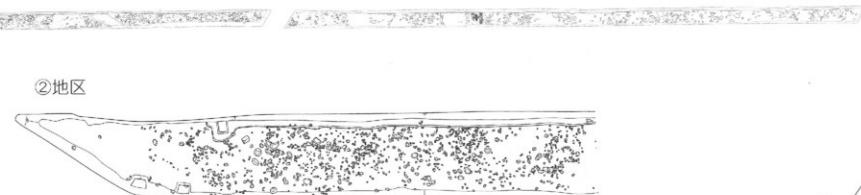
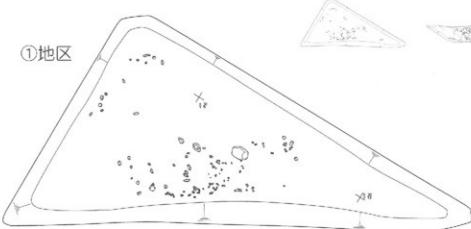
第3図 柳田遺跡調査区全体図

① 154.65m²

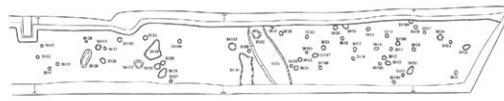
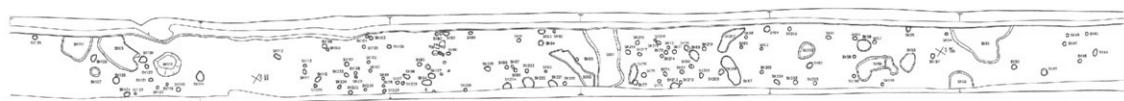
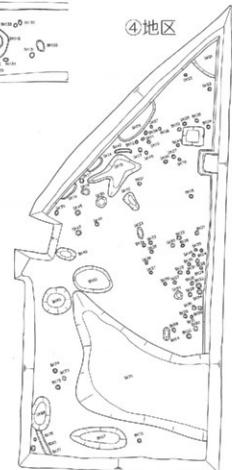
② 365.84m²

③ 670.41m²

④ 187.37m²

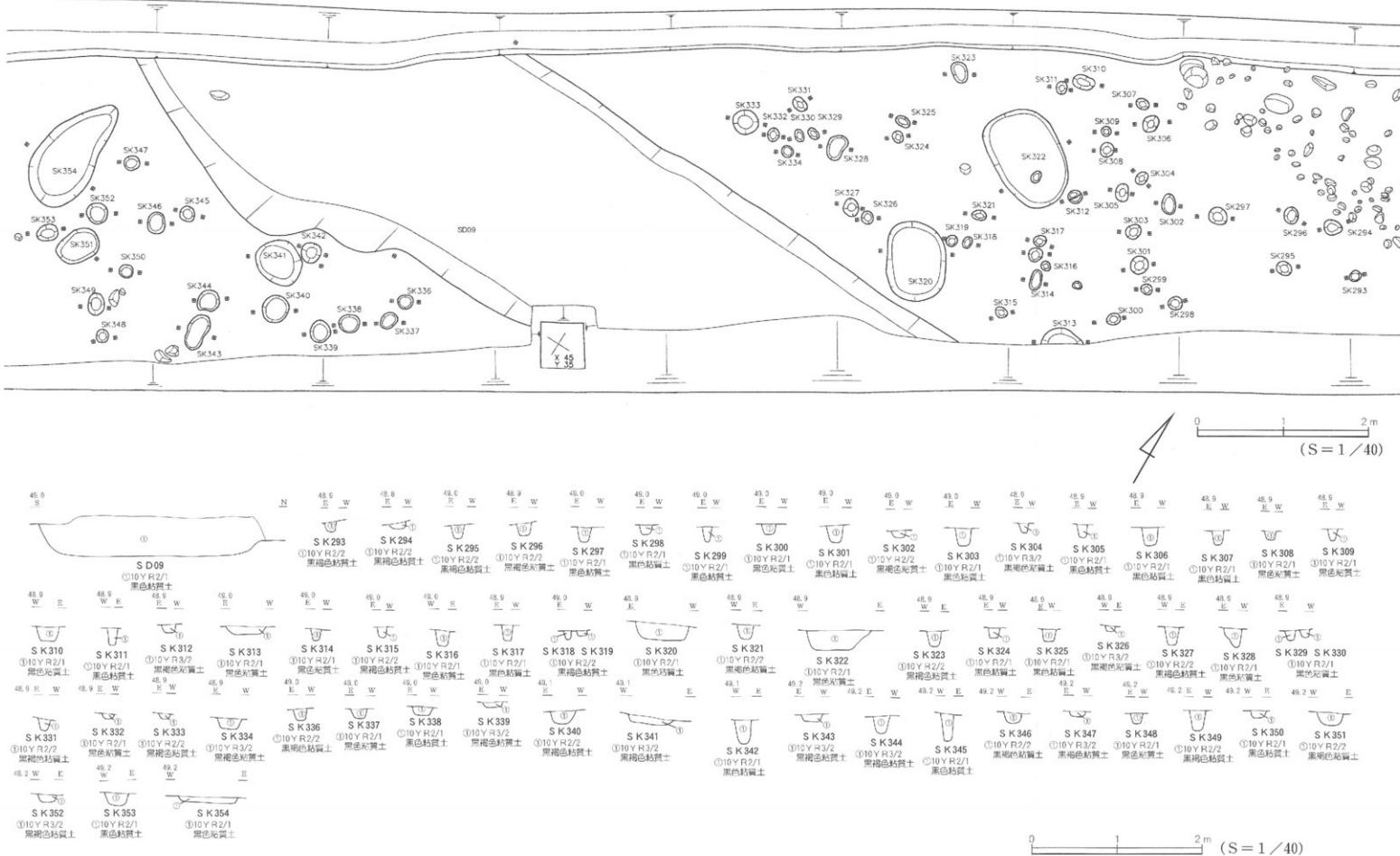


④地区

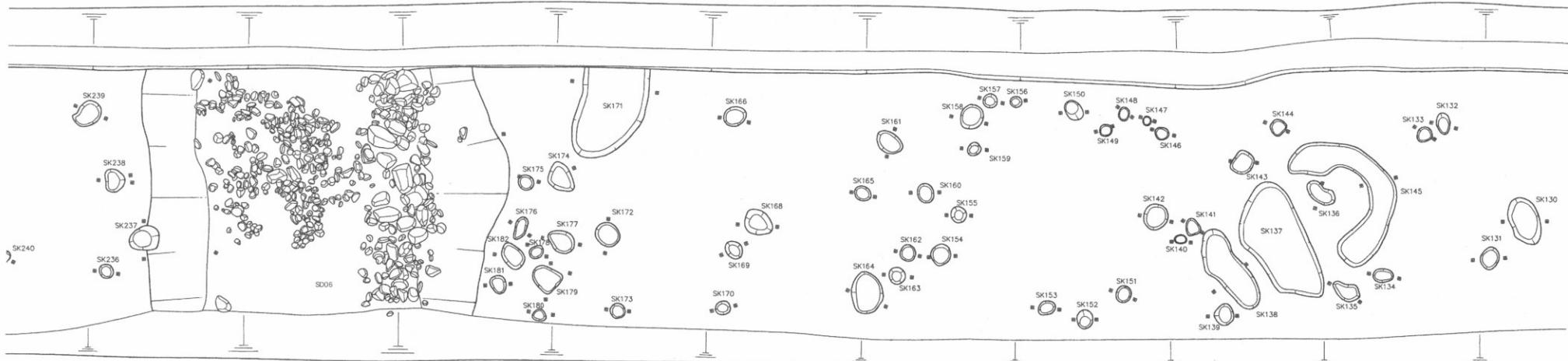


0 10 20 30 40m (S = 1 / 200)

第4図 柳田遺跡②地区 遺構 平面・土層図

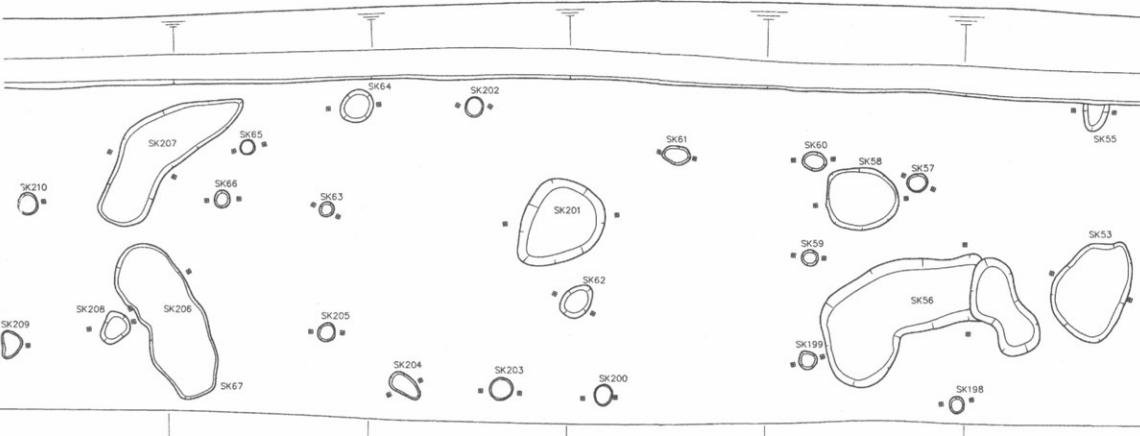
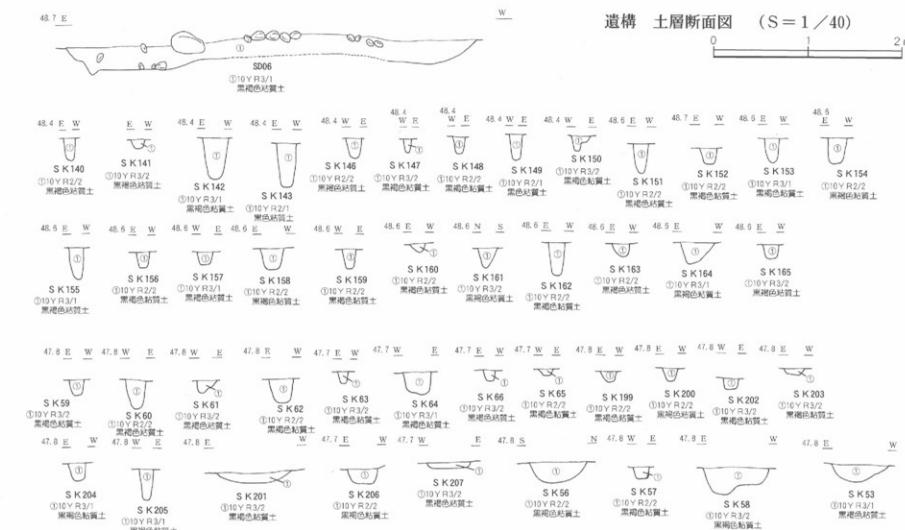


第5図 柳田遺跡③地区 遺構 平面・土層図



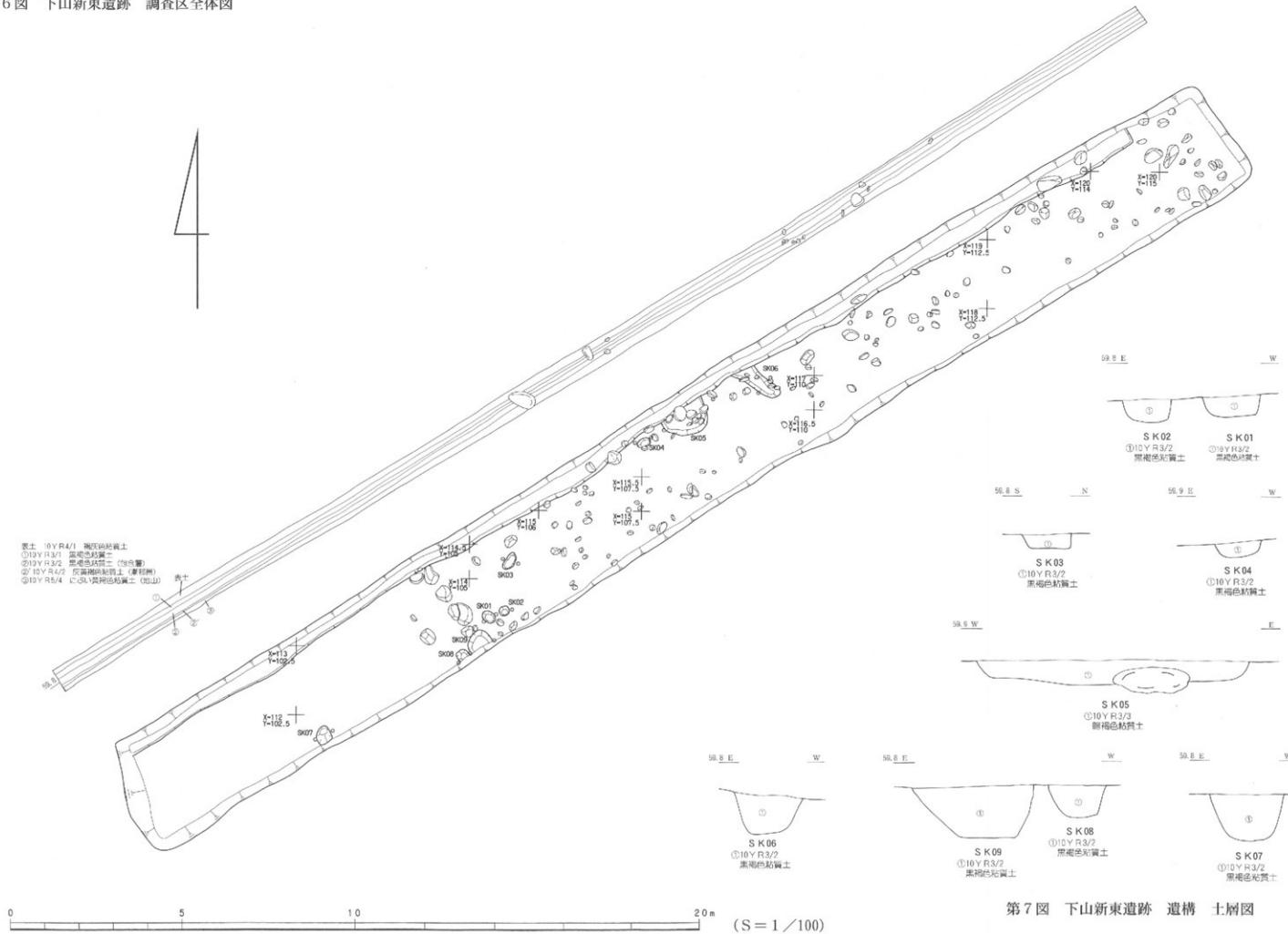
遺構 土層断面図 (S=1/40)

前 工程剖面图 (S-1 / 40)



0 1 2m ($S = 1/40$)

第6図 下山新東遺跡 調査区全体図

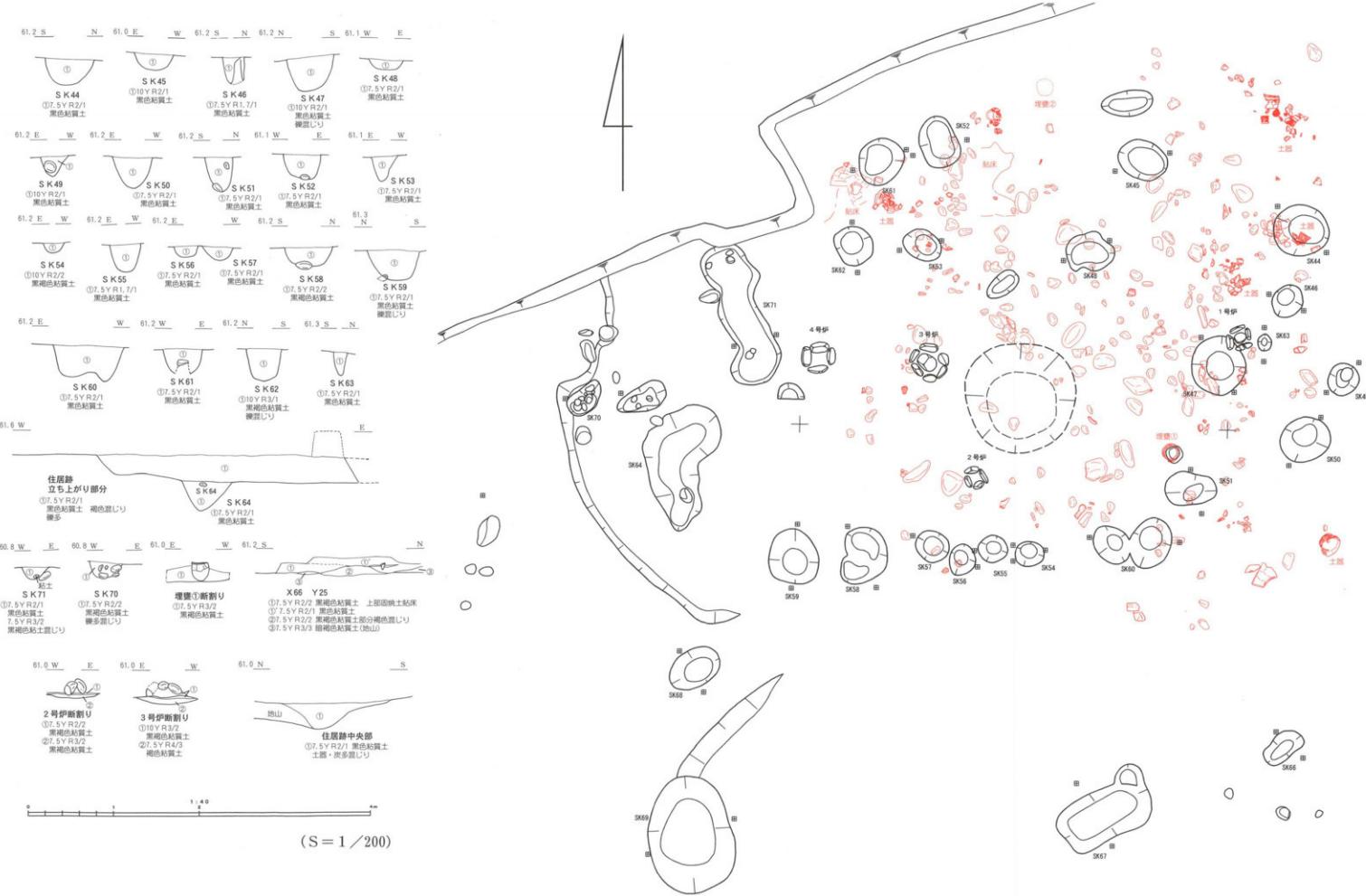


第7図 下山新東遺跡 遺構 土層図

第8図 下山新遺跡 調査区全体図



第9図 下山新遺跡 住居跡 平面・土層図



柳田遺跡

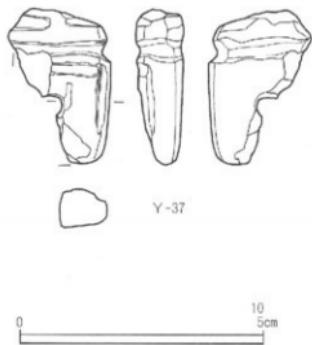
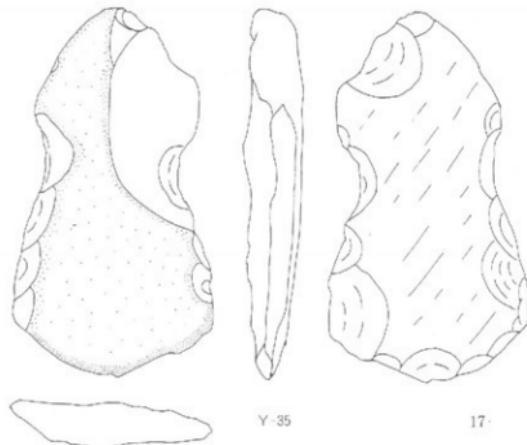
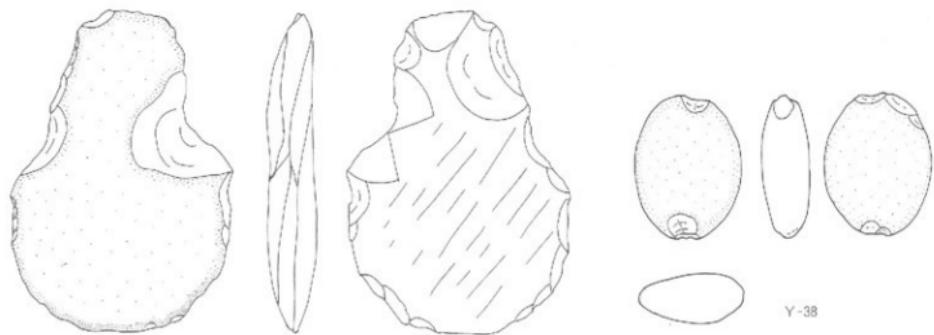


下山新東遺跡



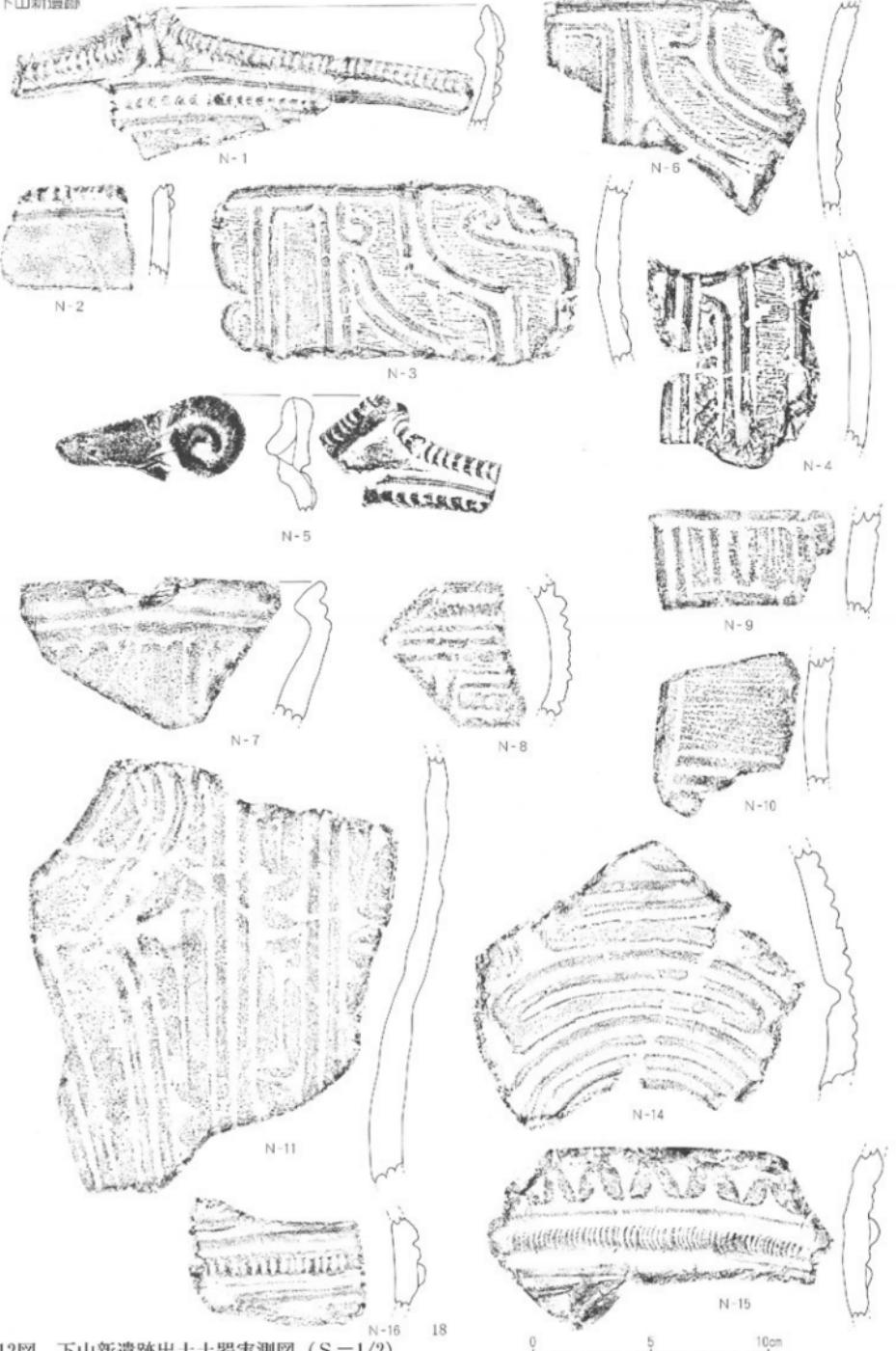
0 5 10cm

16 第10図 柳田遺跡・下山新東遺跡出土土器実測図
(S=1/2)

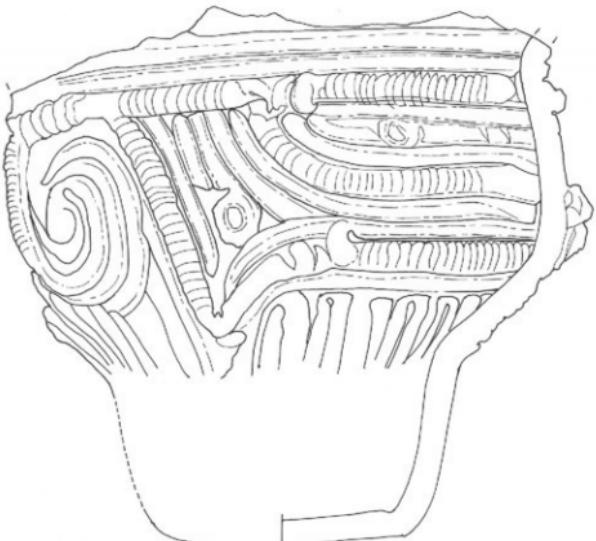


10
5cm

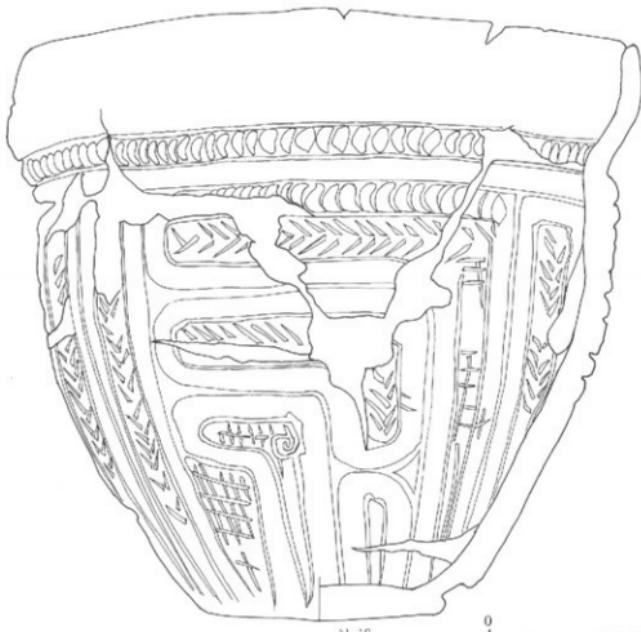
第11図 柳田遺跡出土石器実測図
(Y-33-36 S=1/2 Y-37 S=1/1)



第12図 下山新遺跡出土土器実測図 ($S = 1/2$)



N-17 0 10 cm (S = 2/3)

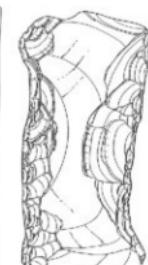
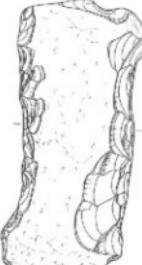


N-18 0 5cm (S = 4/5)

19 第13図 下山新遺跡出土土器実測図 (N-17 S=2/3)
(N-18 S=4/5)



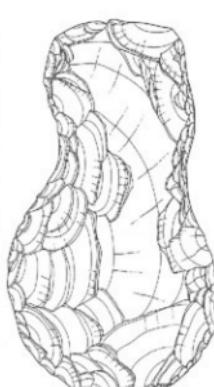
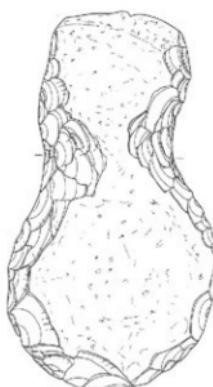
N-19



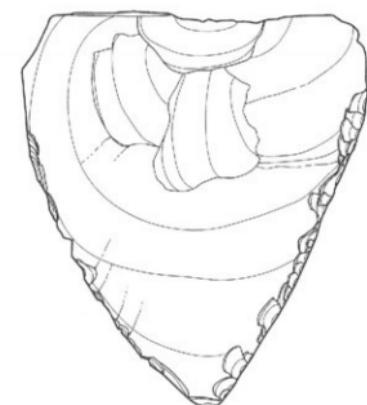
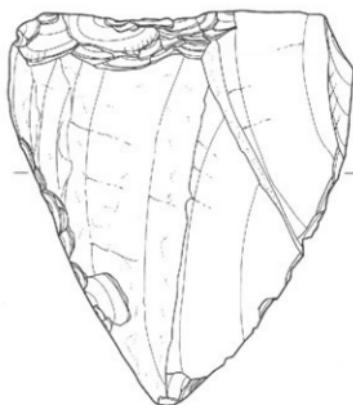
N-20



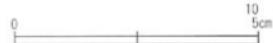
N-22



N-21



N-23



第14図 下山新遺跡出土石器実測図
(N-19-22 S=1/2 N-23 S=1/1)

IV まとめ

1 地形

柳田遺跡

黒部川旧扇状地と小川扇状地によって形成される微高地に存在する。縄文前期から晩期、中世の遺跡として、過去の調査においても住居跡をはじめ、多くの遺構や遺物が確認されている。また、出畑の作業時に石器や土器などがよく発見されたりすることなどから、地元でも古くから縄文時代の遺跡が広がる地域として語り継がれている。

下山新東遺跡・下山新遺跡

共に黒部市（旧宇奈月町）愛本橋付近を扇頂部とする黒部川によって形成された舟見野扇状地の末端、隆起扇状地内に位置する。地下水も豊富で当時より貴重な湧水資源として利用されており、この地域においても朝日町、黒部市（旧宇奈月町）、人善町を含めて段丘上、段丘下に多くの縄文遺跡が確認されている。

2 遺構

柳田遺跡（平成16年度調査）

全長300m、幅約6mの細長い調査区であり、遺構（SK・SD）の確認はできたが、区外に延びる遺構全体の把握は難しい。③地区において明確な規則性は無いが円形に並ぶ土坑群が確認された。か跡と考えられる遺構も掘り込みや周溝もないため断言はできないが、土坑の直径（20～30cm）・深さ（20～40cm）と一定しており、さらに縄文土器の破片や石器がこの遺構周辺に集中して出土している。中世の明確な遺構は確認できなかった。遺構は削平されたと考えられるが、縄文土器よりも多くの中世陶磁器類が出土している。縄文・中世ともこの調査区周辺は何らかの生活圏に含まれていたことは大いに考えられるだろう。

下山新東遺跡（平成16年度調査）

調査面積も少なく、調査区の幅も短いため、確認された遺構の全体的な結びつきを考察することは困難である。上部遺物包含層もかなり削平・擾乱されており、これらによってほとんどの遺物・遺構が消滅したものと考えられる。出土遺物から縄文時代の遺跡と推定されるが、この遺跡は周辺の柳田遺跡・不動堂遺跡・下山新遺跡等の大規模な遺跡とは違い、扇状地上に点在する小規模遺跡の一角であり、遺跡の中心からは離れた遺物散布地であると考えられる。

下山新遺跡（平成17年度調査）

調査区東側から中央部にかけては、住宅の基礎部分がかなり深くまで食い込んでいたことが確認され、遺物採集は可能であったがほとんどの遺構が削平された状態であった。

しかし、調査区西側は比較的の遺物包含層の状態もよく、縄文時代中期と推定される住居跡が確認された。炉跡が4基、埋甕が2箇所、住居跡の立上り部分が西側一角に確認できた。炉跡の並びに規則性が無く、柱穴の並びも特徴的な6基もしくは10基のシンメトリーではないため、いくつかの住居が重複している可能性が考えられる。ただし、柱穴の範囲から全体で1棟の住居跡と推測した場合、不規則な並びの4基の炉を持ち、中央部に大型の土坑を有する6m×10mの長円形を呈する大型住居跡ということになる。炉石は扁平な石を他の石で固む形式と、4個の石を組み合わせて方形を作る形式で、これは不動堂遺跡2号住居跡（17m×8m）の特徴と一致する。同類の遺構が、立山町の野沢狐幅遺跡でも確認されており、時代も縄文中期、出土した土器の編年も一致する。この遺跡は、不動堂遺跡の住人と同じ湧水を利用し、同時期に栄えた遺跡である可能性が非常に高い。これらの遺跡の関連性については今後の検討課題であろう。

3 遺物

柳田遺跡

調査区内における過去の削平や擾乱等を大きく受け、上器・陶磁器共にかなり磨耗が激しい。遺物の大半が包含層からの出土で、遺構内からの出土は少ない。

主に出土した遺物は縄文土器では前期・中期・後期・晚期と幅広く確認された。中世の遺物では主に、珠洲・土師質土器・青磁が確認されている。縄文・中世共に完形品ではなく、細かな破片でさらに磨耗も激しく復元もできない状態のものがほとんどを占める。

石器は広い範囲で確認された。特に打製石斧は完形品の数（16点）をみると、磨製石斧よりも多く出土している。磨製石斧は欠損品及び未成品がすべてを占める（54点）。黒曜石や蛇紋岩等の原石及び剥片類は、平成14～17年に実施した県道拡幅部分にかかる調査と比較すると圧倒的に少ない（黒曜石5点）。石製品製作の中心地は今回調査区よりも東側（前回調査区寄り）に位置していたものと考えられる。

下山新東遺跡

遺物包含層からの出土がほとんどを占める。縄文上器数点、陶磁器1点、黒曜石剥片1点が出土した。表上から遺構検査面までが非常に浅く、工事等の影響により包含層がかなり削平・擾乱されているため、土器自体の傷みが激しく文様が判別できない。周辺の遺跡や過去の調査における出土遺物から考察して縄文前期・中期・晚期の可能性が窺える。

下山新遺跡

復元可能な縄文土器が4点（内2点は埋甕）他、住居跡周辺でまとまって上器が確認された。住居跡南側で出土した深鉢は縄文中期前葉の新保・新崎式土器に比定される。住居跡北側で出土した台付鉢は中期中葉の上山田式（天神山式）となる。若干の違いは見られるものの、両方ともこの地域で頗著に見られる種類であり、過去の調査でも数多く確認されている。他の破片も主に中期前葉から中葉のものがほとんどを占めている。

石器類においては打製石斧・磨製石斧の他、翡翠原石を用いた敲き石が確認された。

また、石製品では直径約3.5cmの円盤型石器の未成品や削器が出土している。これらは朝日町境A遺跡の出土遺物にも同類を見ることができる。

4 結

今回調査を行った柳田遺跡の時代構成は出土した遺物から縄文前期末葉から晩期中葉及び中世を中心に栄えた遺跡と考えられる。ただ、遺物が小片なものに限られることや、明確に時代を特定できる遺構が存在しないもしくは削平により消滅していることから、この時代の生活の中心地は今回の調査区よりさらに東側周辺に拡がりを見せていましたと推測される。

下山新東・下山新遺跡周辺は広い範囲で縄文時代全般で栄えたと考えられるが、特に縄文時代中期に時代の中心があったと考えられる。特に下山新遺跡の調査で発見された住居跡周辺においては、圃場整備等における削平も受けおらず、遺物は過去の調査に比較すると量自体は多くはないが、状態もよい。この住居跡が確認された遺構面は、調査区外北側に拡がりを見せているため、現在耕作地となっている下面にも住居跡等が存在している可能性は非常に高い。

この時代は町内においても大規模な遺跡が多く（境A遺跡、不動堂遺跡など）、特に不動堂遺跡に関しては下山新東・下山新遺跡共に同じ湧水地を利用していたと考えられ、これらの遺跡の関連性については今後の調査においても十分に検討を重ねる必要があるといえよう。

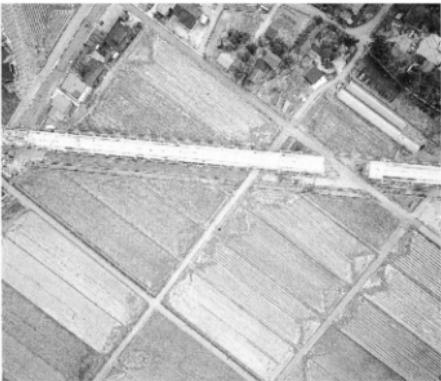
参考文献

- 財団法人富山県文化振興財団 2003 「埋蔵文化財調査概要－平成14年度－2003－」
- 朝日町教育委員会 1978 「富山県朝日町大家庄地区内埋蔵文化財予備調査概要
下山新東遺跡・高橋遺跡」
- 朝日町教育委員会 2003 「富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書」
- 朝日町教育委員会 2005 「富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書 II」
- 富山県朝日町 1982 「国指定史跡 不動堂遺跡－その概要と整備のあらまし－」
- 富山県教育委員会 1973 「富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報」
- 富山県教育委員会 1974 「富山県朝日町下山新遺跡第2次発掘調査概報」
- 富山県教育委員会 1975 「富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓発掘調査概報」
- 富山県教育委員会 1990 「北陸自動車道遺跡調査報告
—朝日町編 5—境A遺跡石器編（本文）
—朝日町編 5—境A遺跡石器編（写真図版）」
- 富山県教育委員会 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告
—朝日町編 6—境A遺跡土器編（本文）
—朝日町編 6—境A遺跡土器編（写真図版）」
- 立山町教育委員会 1985 「富山県立山町総合公園内野沢狐幅遺跡発掘調査概報」

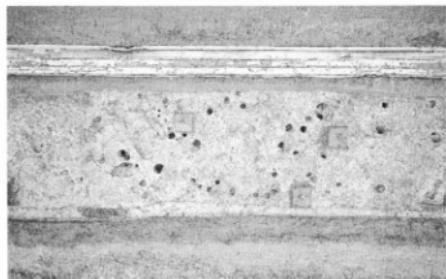
写真図版



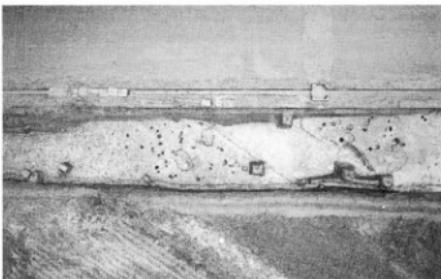
柳田遺跡遠景北より



調査区全景



③地区 住居跡か



②地区 遺構集中区



S D06



S D06上層



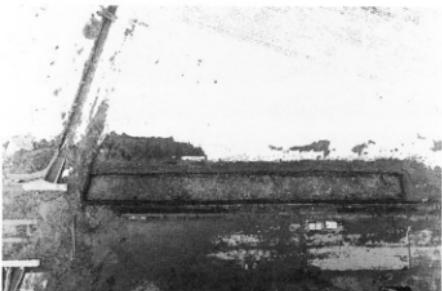
SK117



SK273



下山新東遺跡遠景



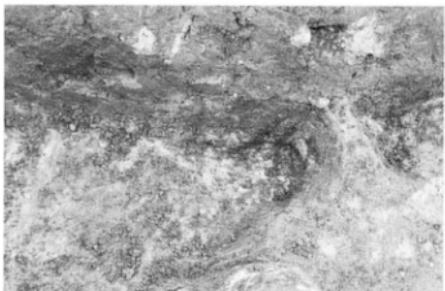
調査区全景



SK05



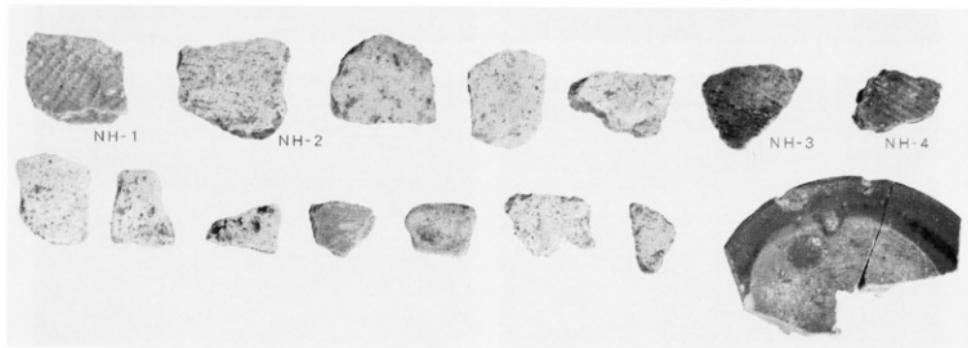
SK06



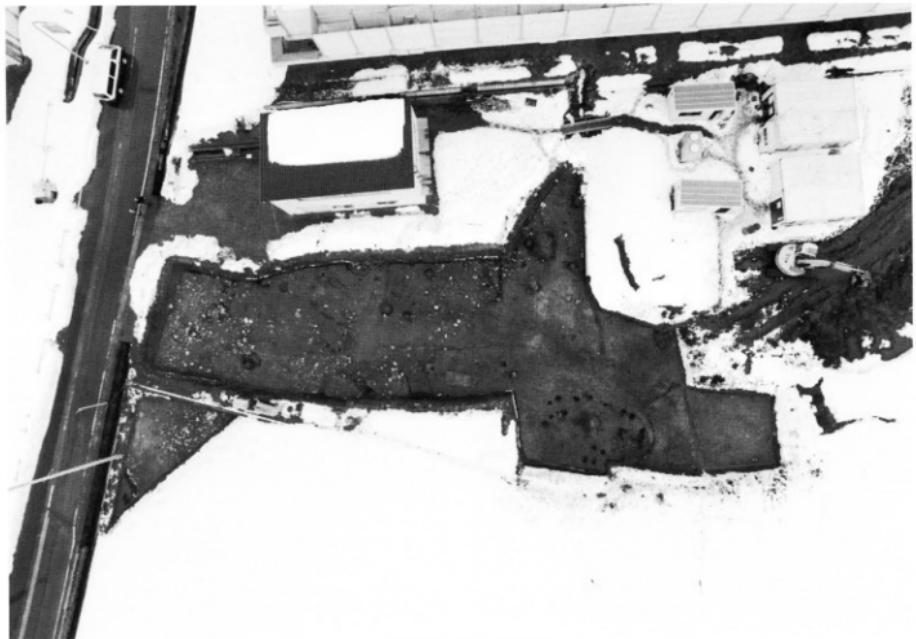
SK09



作業風景



下山新東遺跡出土 土器 (S=1/2)



下山新遺跡調査区全景



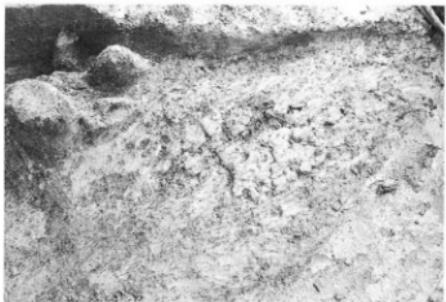
住居跡



調査前風景



住居跡検出状況



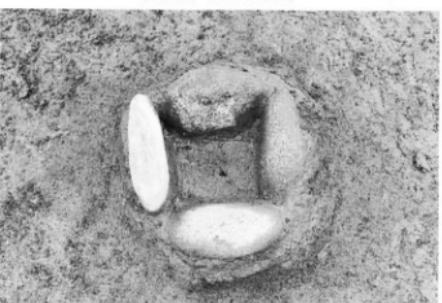
住居跡 床土



住居跡 立上り部分



1号炉



2号炉



3号炉



4号炉



土器出土状況



土器出土状況



埋甕断面

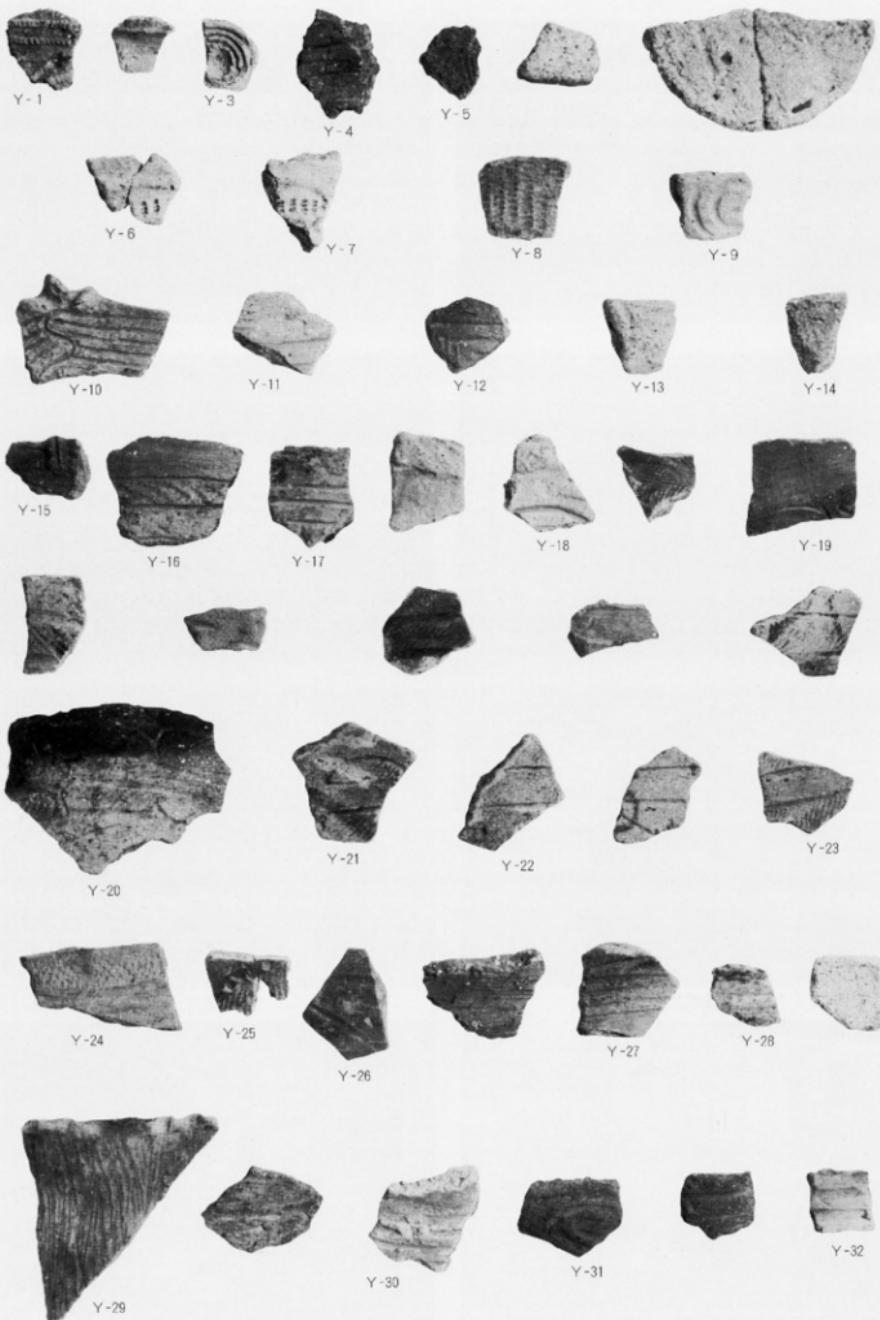


3号炉断面

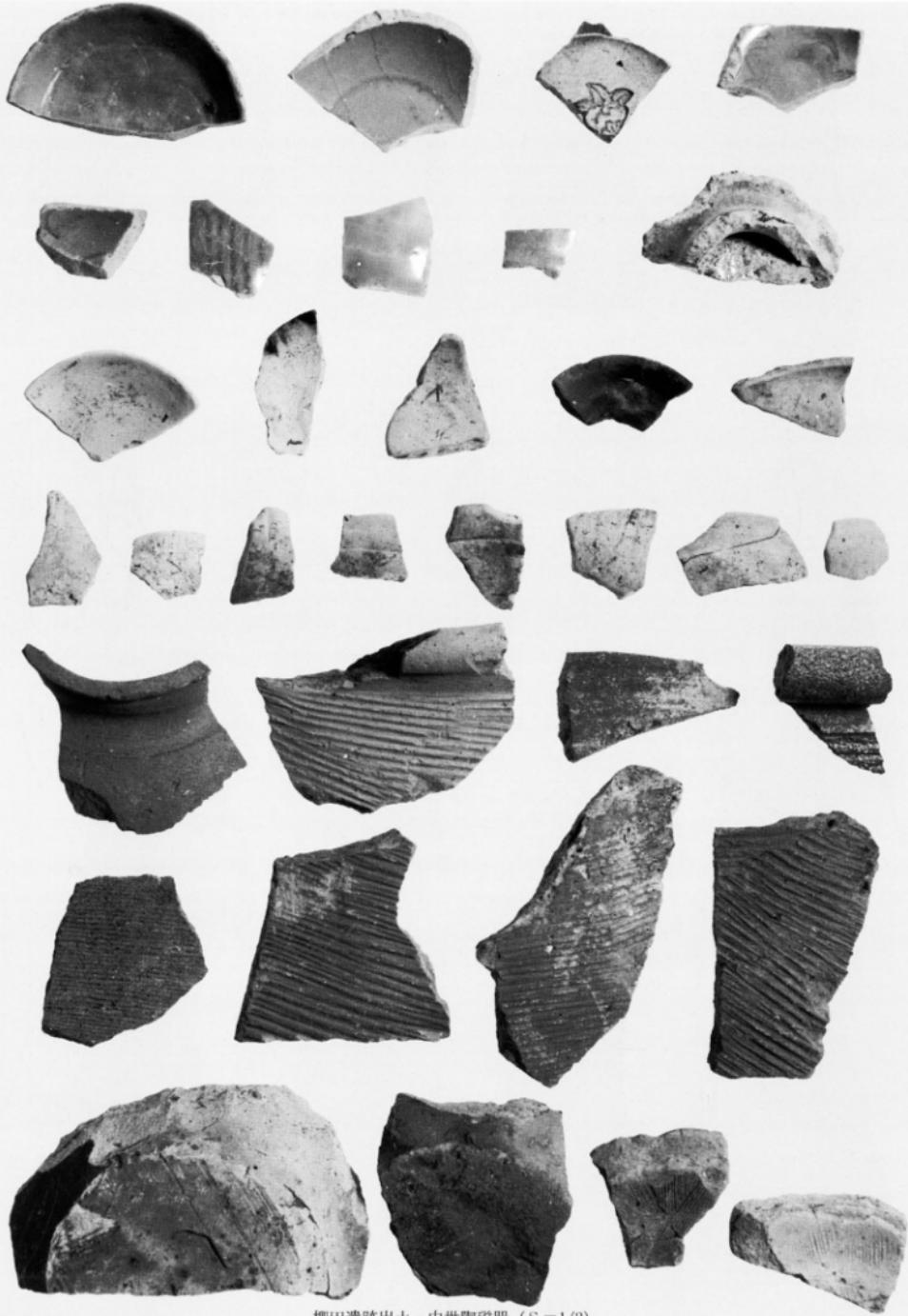


上層（住居跡北側）





柳田遺跡出土 繩文土器 (S=1/2)



柳田遺跡出土 中世陶磁器 (S = 1/2)

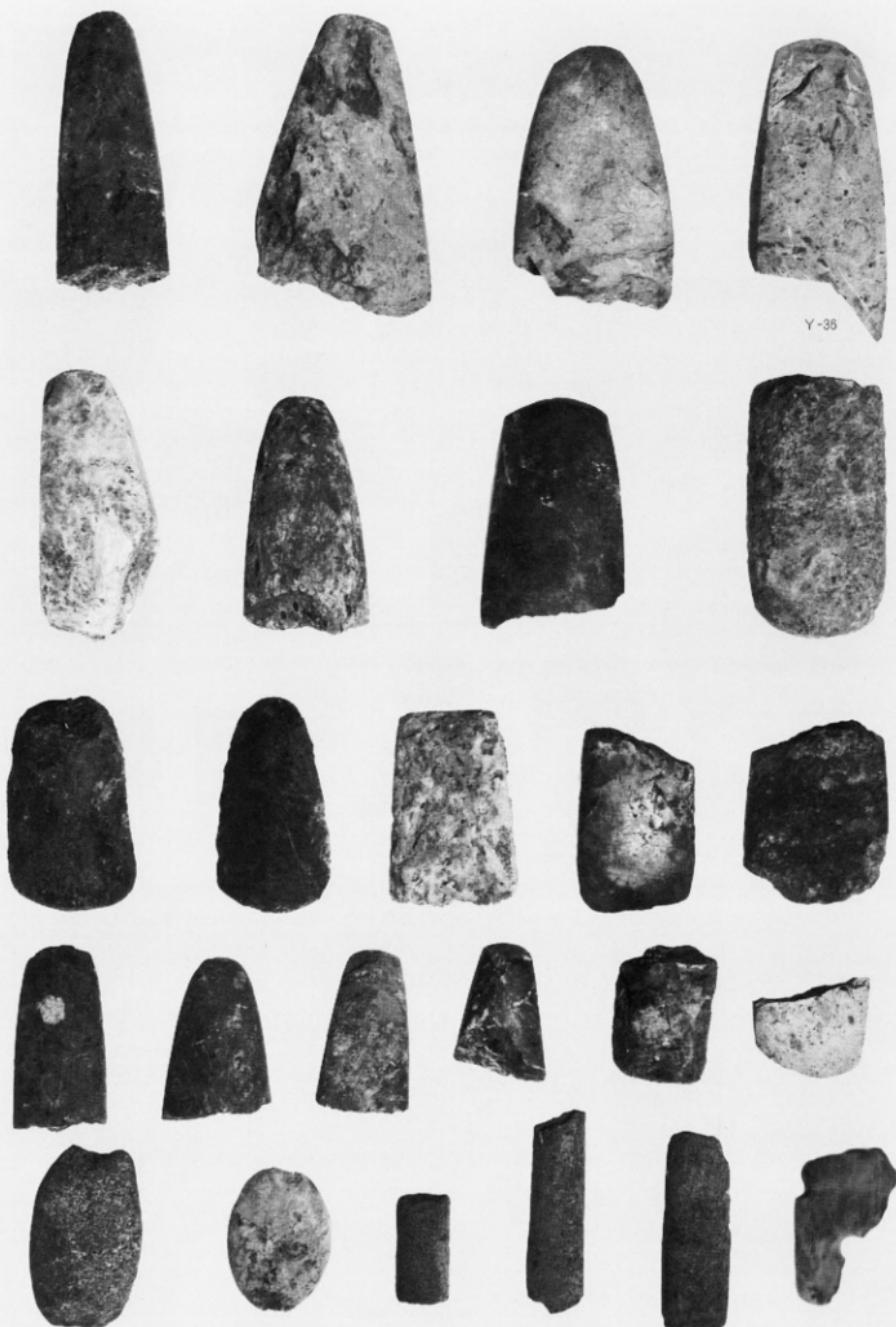


Y-33



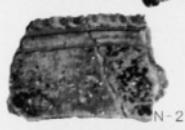
Y-34

Y-35
柳田遺跡出土 打製石斧 ($S = 1/2$)



柳田遺跡出土 磨製石斧 (S=1/2) (Y-37) のみ1/1

Y-37

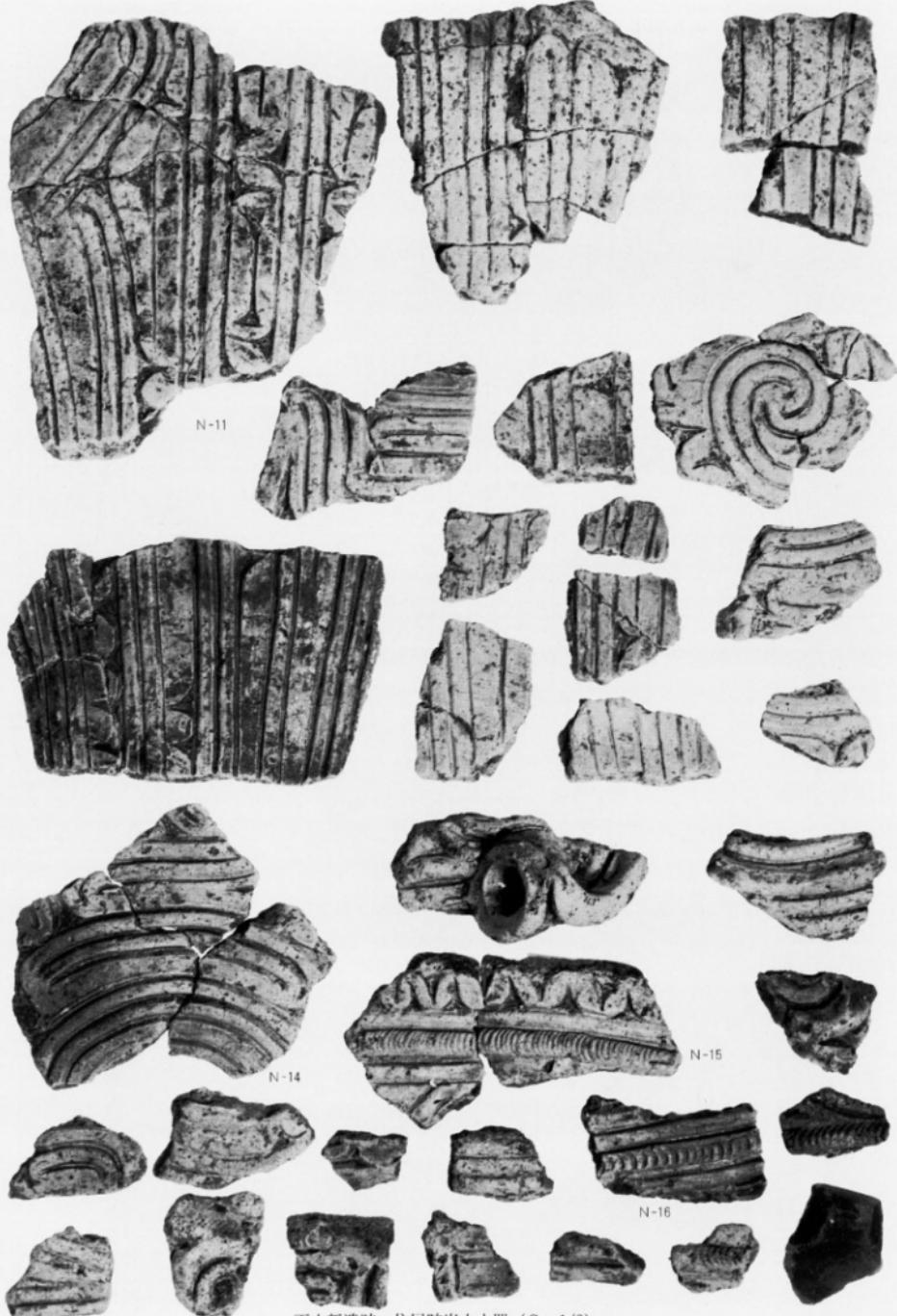


N-9

N-10



下山新遺跡出土 住居跡出土土器 ($S = 1/2$)



下山新遺跡 住居跡出土土器 (S=1/2)



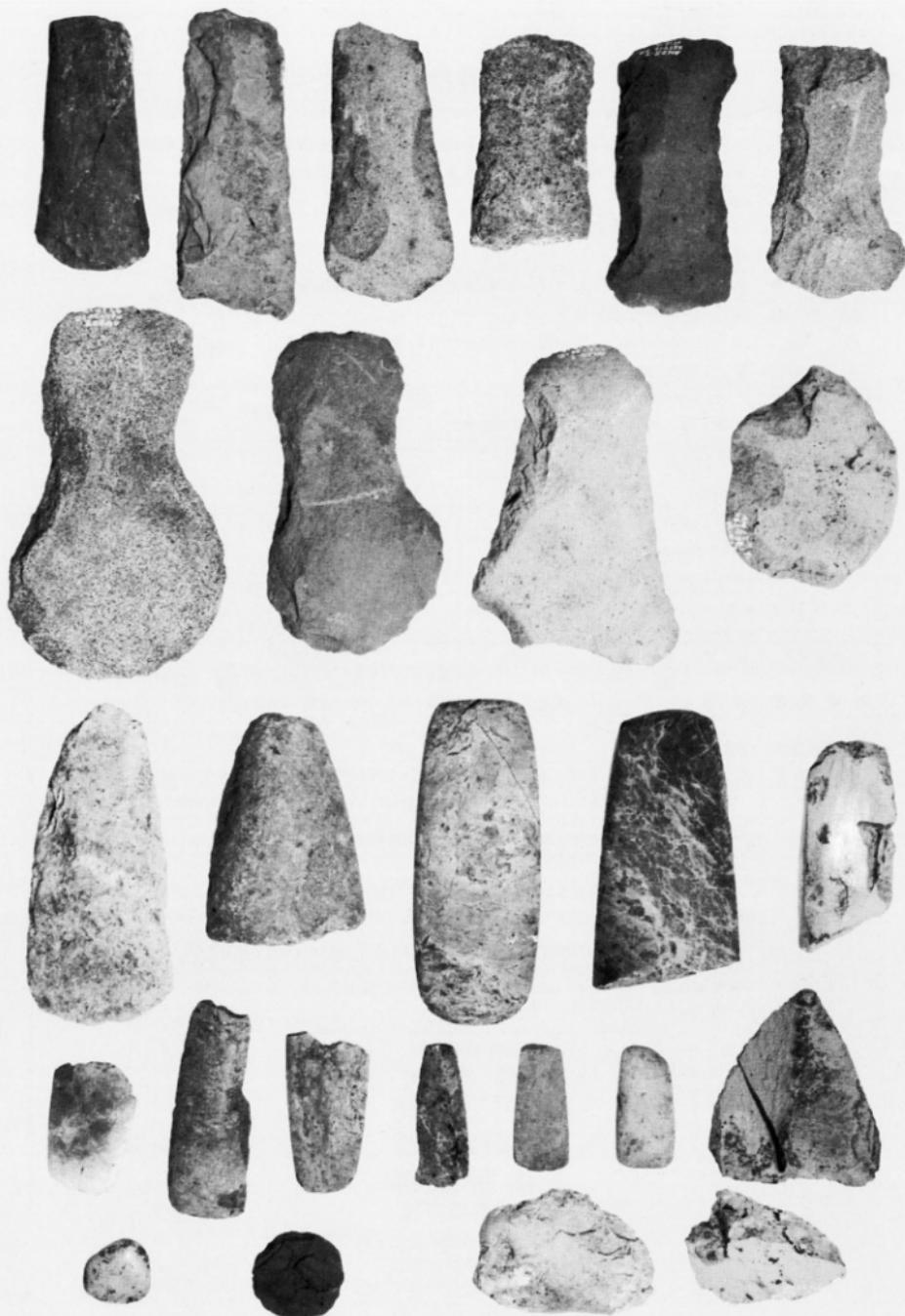
住居跡X66Y27 (S=1/2)



住居跡X64Y27 (S=1/2)



住居跡X68Y27 (S=1/2)



下山新遺跡出土 石器類 (S = 1/2)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんあさひまち やなぎだいせき・にざましんひがいせき・にざましんいせきはつくつちょうさほくくしょ						
書名	富山県朝日町 柳田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡発掘調査報告書						
副書名	農免農道新川中部地区整備事業に伴う発掘調査報告書						
卷次	(2)						
シリーズ名	朝日町発掘調査報告書						
シリーズ番号	第10集						
編著者名	財団法人朝日町文化・体育振興公社 文化財保護主事 鳥 瑞穂						
編集機関	朝日町教育委員会						
所在地	〒939-0793 富山県下新川郡朝日町道下1133 TEL 0765-83-1100						
発行年月日	西暦2006年11月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°' "	°' "		
柳田遺跡	富山県下新川郡朝日町大字庄 796番地他	16343	343063	36° 55' 26"	137° 33' 31"	041016 ~ 050218	農免農道 新川中部 地区整備 事業に伴 う発掘調 査
下山新東遺跡	富山県下新川郡朝日町下山新342番地他	16343	343068	36° 54' 54"	137° 32' 25"	050114 ~ 050314	
下山新遺跡	富山県下新川郡朝日町下山新字馬坂 233番地他	16343	343069	36° 54' 42"	137° 32' 02"	051003 ~ 060120	673
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
柳田遺跡	集落	縄文 中世	土坑・溝	縄文土器・打製石斧・磨製石斧・石礫・石鏟・ 石棒・石器・石刀・玉類・木成品・原石・砾石・ 珠洲・土師質土器・青磁			
下山新東遺跡	散布地	縄文	上坑	縄文土器			
下山新遺跡	集落	縄文	土坑・溝・住居跡	縄文土器・打製石斧・磨製石斧・凹鑿石器・削器・砾石・原石			
要約	<p>柳田遺跡の今回調査区における時代区分は出土遺物等から、縄文前期末葉から晩期中葉、及び中世が中心と考えられる。ただし、削平・擾乱が激しいため人手の遺構が消滅しており、縄文時代の住居跡と推測できる十坑群は確認できたが、中世の遺構は確認できなかった。しかし、遺物に関しては縄文土器よりも中世の陶磁器類のほうが数多く出土しているため、何らかの生活区域であったことは推測できる。</p> <p>下山新東遺跡は出土遺物と過去の調査から考察して縄文中期の遺跡と判断した。今回の調査区は遺跡としては非常に小規模であり、この時代に栄えた遺跡の中心地からは離れた遺物散布地であることがいえる。</p> <p>下山新遺跡では、縄文時代の住居跡が確認された。異なる住居が重複したものか、4基の軒を持つ大型住居跡なのかは判別不能であったが、出土した土器から縄文中期前葉から中葉にかけての住居跡であることがわかった。過去の調査からも同様の土器が山上しており、一帯がこの時期を中心にして栄えたことをさらに明確に位置づける調査となつた。</p>						

平成18年11月発行

富山県 朝日町 柳田遺跡 下山新東遺跡 下山新遺跡 発掘調査報告書

編集 財団法人朝日町文化・体育振興公社

発行 朝日町教育委員会

富山県下新川郡朝日町道下1133

印刷 有限会社 両越印刷

